

# 教職支援室便り（8月号）

令和3年 8月16日（月）

文責：教職支援室 曾我文敏

☎0985-20-4808

## 教員採用選考試験（第一次試験）終わる

第一次試験が終わりました。学生の皆さんは、それぞれ緊張感の中で、試験に臨んだことでしょう。しかし、試験に対しては、これまで、積極的に筆記試験等の対策に取り組んできたことが、心の拠り所になったと思います。昨年10月から本年6月下旬にかけて、60コマ以上の特別講座に取り組むとともに、自宅等での自主学習に励んできたことは、何よりの財産です。試験結果は気になるとは思いますが、「やれるだけのことは、すべてやった。」という自信を、大切にしてほしいです。

### <受験しての感想>

試験当日は、あまり緊張せずに問題に取り組むことができたと思います。問題の中には、いくつか初めてみる問題もありましたが、落ち着いて解くことができました。昨年10月からの特別講座や、個別学習で学んだことが自信につながっていたのだと思います。

特別講座で演習したことが、しっかり試験に出ていました。むずかしそうな問題についても、安心して取り組みました。週2コマの特別講座でしたが、半年以上勉強したことになるので、「塵も積もれば山となる」と実感しました。  
合格していますように！

一次試験を終えて、ここまであっという間の日々だったと思いました。特別講座では、たくさんのテーマを扱っていただいたので、本番では、自信をもって取り組むことができました。実際に試験では、特別講座で扱った内容が、いくつも出ていたので本当にやっていてよかったと思いました。

そして、現在、二次試験対策の特別講座も、第4週が終わろうとしています。学生の皆さんが、コロナウィルス対策を徹底しながら、週計画として「15コマから20コマ」のプログラムを立て、週ごとの課題を設定して、演習が行われています。私も、学生の皆さんと貴重な時間を、すべて共有しています。学生の皆さんの「やれるだけのことは、すべてやりたい。」という思いを受け、私自身も「やれるだけの支援は、すべてやりたい。」という思いです。次頁に、現在の特別講座の状況を紹介します。

# 現在の教職特別講座・状況報告

## 面接

面接のオリエンテーション（プレゼンテーション）では、2つの人物評価の視点（①教職への情熱、人柄、適性等、②教職教養に関する知識・理解）について、試問例を示しながら解説しました。全国的な傾向としては、①教職への情熱、人柄、適性等についての試問（通常試問）が多く行われています。しかし、②教職教養に関する知識・理解（教職教養試問）を取り入れている自治体もあることから、受験自治体によっては、教職教養試問も交えて演習しています。また、本年度は、試問数307で構成される試問集を用意し、演習に役立てています。

面接演習の始めは、面接に慣れるために集団面接の形態で行います。そして、徐々に個人面接の形態とし、私の方で受験自治体に応じて試問しながら、回答内容への助言をしています。この演習を重ねる中で、学生の皆さんの面接力が向上していきます。面接力とは、「自分の考えを率直に述べ、教師になりたい思いを、初めて出会う人に（面接官）に、しっかりと伝える力」です。

面接演習についても、多くの時間を要しますが、時間の経つのも忘れるほどの取組が見られます。そこには、面接力の向上とともに、総合的な人間力を高めている学生の皆さんの姿があります。

## 模擬授業

### <小学校：模擬授業演習>



### <中学校：模擬授業演習>



### <高等学校：模擬授業演習>



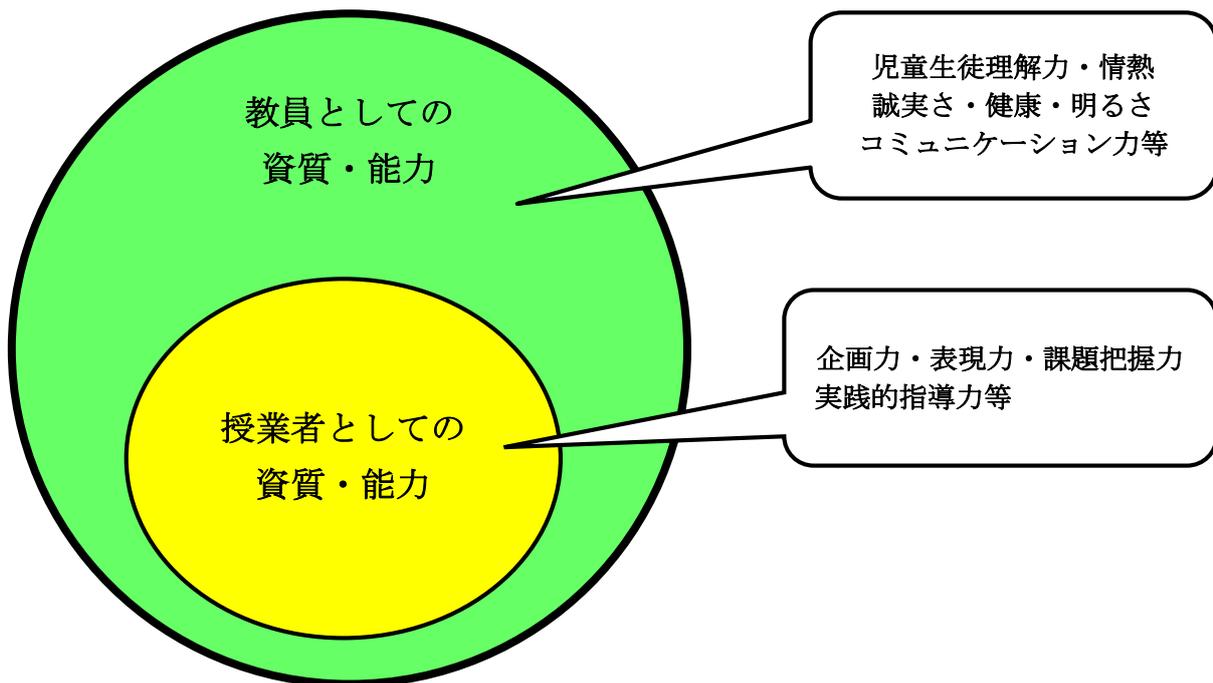
模擬授業については、受験校種（小学校、中学校・高等学校）によりグループを編成し、それぞれの課題を踏まえながら、実践的な演習を行っています。本年度も、模擬授業の目的、評価の視点、評価項目、面接官の試問例、留意事項等についての、オリエンテーション（プレゼンテーション）からスタートしました。

模擬授業の中で、特に支援していることは教材解釈です。模擬授業の回数をこなすだけでなく、教材の見方・考え方（指導のポイント、魅力やおもしろさ、むずかしさ）等を助言することが重要です。この取組は、模擬授業を目的化せず、それぞれの校種の、教員に係る資質・能力（授業力）につながることを、期待してのものです。具体的に小学校の国語科で言えば、「詩、物語文、説明文、作文、俳句」などの教材解釈を通して、授業の楽しさを体感するということです。中学校・高等学校の英語科については、本学の英語科の先生に指導助言をお願いしています。学生の皆さんは、日を追うごとに、模擬授業力向上への意欲の高まりが見られ、発問にも深まりが感じられるなど、力を付けているのがわかります。

# 面接力・模擬授業力向上を目指す：その3

受験者の皆さんの重要な課題の一つに、面接力や模擬授業力の向上があげられます。そこで、6月号から、その課題解決のための資料を掲載しています。今回は、その3として、「模擬授業における評価の視点」、「模擬授業評価のポイント」について紹介します。

## 1 模擬授業における評価の視点



### <教員としての資質・能力>

- 明るさ、さわやかさが感じられる。
- 児童生徒に語りかける優しさがある。
- 語調、抑揚に配慮している。
- 児童生徒への視線が適切である。
- 児童生徒を自然体でほめることができる。
- 表情の豊かさが感じられる。等

### <授業者としての資質・能力>

- 問題意識・課題意識を喚起している。
- 学習課題・めあてが適切である。
- 児童生徒の発言を生かしている。
- 板書が適切である。等
- 学習の見通しをもたせている。
- 学習意欲を喚起する発問をしている。
- 児童生徒を引きつける演技力がある。

## 2 模擬授業評価のポイント

### (1) 発声力（適切な音量等）

すべての児童生徒に伝わるような音量、明瞭な言語で滑舌よく話すようにする。授業の中では、語調、抑揚にも配慮する。

## (2) 相手（児童生徒）意識の表現

模擬授業であっても、相手意識をもつこと。児童生徒に対して、課題を意識するような投げかけが重要である。また、児童生徒を、適切に指名することも必要である。受験者1人だけの授業、つぶやくだけの授業では評価が得られない。

更には、児童生徒の発言を生かし、ほめる場面をつくったり、児童生徒を集中させるために発問の後に沈黙したり、意図的に間違った答えを言ったりすることも大切である。

## (3) 板書の正確さと配慮

誤字、脱字、漢字の筆順にも気を配る。児童生徒に見えるように板書する。ときには手を止めて、説明することも有効である。また、授業の流れが分かるような板書になるようにする。

# 道徳の教科化に思う！（シリーズ51）

平成29年の6月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。今回は、「教材・車いすの少年」に関する発問（構成）及び解説を紹介いたします。

### 1 教材名「車いすの少年」

### 2 出典「副読本」 日本文教出版

### 3 対象学年 中学校1年生

### 4 ねらい 内容項目B－（6）「思いやり、感謝」

他者に対して思いやりのある行為を実践するためには、思いやりのある行為の大切さを深く理解しながら、そのときの状況を考えた判断力、決断力、実行が大切であるということが分かり、「人間尊重の精神」をもって進んで実践しようとする態度を養う。

### 5 教材内容（概略）

イギリスに滞在していた主人公は、ある日大通りの交差点で、車いすの少年を見かける。少年は、人々の群れの中を進んでいたが、突然車いすの車輪を、道路の側溝に落としてしまう。主人公は驚いて駆け寄り助けようとするが、5、6人の外国人から、やめるよう怒鳴られる。憤慨した主人公であったが、そのうち懸命に少年を励まし続ける、その人たちに気付く。そして、少年は、悪戦苦闘の末、自力で車輪を道路にもどす。それを見守っていた周囲の外国人は、一斉に歓声をあげる。

### 6 発問（構成）

Q1. 少年が車いすを側溝に落としたことに気付いたとき、主人公はどんなことを考えたでしょう。

Q2. 「やめなさい、やめるんだ。」と怒鳴られたとき、主人公はどんな気持ちになったでしょう。

◇補助発問1～外国人を冷淡などと考える主人公をどう思いますか。

◇補助発問2～すぐに冷淡だと考えずに、外国人の言葉は、何か意味があると考えるべきではないですか。

Q3. 少年のところを離れずに、大声で声援を送っている外国人に気付いたとき、主人公はどんなことを考えたでしょう。

◇補助発問3～主人公がすぐに助けようとした行為は、思いやりではなかったのでしょうか。

Q4. 少年を助けなかった行為の中には、主人公を含めた人々のどんな思いがあったのでしょうか。

◇補助発問4～少年は、その夜、家族にどんなことを話したでしょう。

## 7 解説

展開段階の前半においては、主人公が少年を助けたい一心であることをおさえるとともに、外国人を「腹立たしく思い、冷たいと感じる。」気持ちに、十分に共感させることが重要である。そのためには、まず基本発問1として「少年が側溝に車いすを落としたことに気付いたとき、主人公はどんなことを考えたでしょう。」が考えられる。そして、少年を助けたいと思う主人公を浮き彫りにした上で、次の基本発問2『やめなさい、やめるんだ。』と怒鳴られたとき、主人公はどんな気持ちになったでしょう。』、さらには、補助発問「外国人を冷淡などと考える主人公をどう思いますか。すぐに冷淡だと考えずに、外国人の言葉には、何か意味があると考えるべきではないですか。」により、主人公への共感を誘う。補助発問「外国人を冷淡などと考える主人公をどう思いますか。」への生徒の反応は、大いに本授業の成否を左右する。この補助発問で、生徒が「主人公が腹を立てるのは当然だ。」など、主人公を弁護する反応を、多く引き出すことで共感させることができれば、自然に補助発問「すぐに冷淡だと考えずに、外国人の言葉には、何か意味があると、考えるべきではないですか。」を生徒にたたみかけることができる。もちろん、主人公を「その場の状況をよく考えれば、外国人の考えは分かることだ。」などの批判も出されるかもしれないが、弁護も批判も両者とも、主人公のもつ価値観であることをおさえることが大切である。要は、主人公が外国人の価値観に気付いていないことを、認識させておくことが重要である。

この話合いの直後の基本発問3「少年のところを離れずに、大声で声援をおくる外国人に気付いたとき、主人公はどんなことを考えたでしょう。」において、生徒は主人公の価値観について考えることになる。ここでは、「いったいどうしたんだ。」が期待する生徒の反応であるが、もちろん、「外国人は少年のために見守っているんだ。」という気持ちも、出されるのではないかと考える。このとき、「そんなこと、最初から分かっていたことではないですか。」などと生徒に投げかけると、主人公を弁護しながらも、新たな価値観を認めることとなり有効である。そして、補助発問「主人公がすぐに助けようとした行為は、思いやりではなかったのでしょうか。」を発問する。主人公の行為は、確かに思いやりのあるものであったことは間違いないが、外国人のそれは一歩踏み込んだ思いやりであったことを、多面的・多角的にしっかりと話し合わせたいところである。

基本発問4「少年を助けなかった行為の中には、主人公を含めた人々のどんな思いがあったのでしょうか。」に対しての生徒の反応は、少年への一歩踏み込んだ思いやり（人を大切に思う心）などが出されると考えられるが、「ねらい」にさらに迫るためには、「少年の状況を見て、見守ることを決めた。」という判断力・決断力・実行についての反応も期待したいところである。もし出されないときは、「この人々から、どんなことを学びましたか。」と問うことも必要ある。人を大切に作る心、人間尊重の精神に裏打ちされた判断力等が話し合われることが、「ねらい」への迫りには重要である。

最後の補助発問「少年は、その夜、家族にどんなことを話したでしょう。」において、多くの生徒に発表してもらいたい。そして、余韻を残して終わるように配慮する。